

今週の為替相場見通し(2023年1月23日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		127.22 ~ 131.58	129.60	126.00 ~ 132.00
ユーロ	(ドル)		1.0767 ~ 1.0887	1.0855	1.0700 ~ 1.0950
(1ユーロ=)	(円)		137.91 ~ 141.68	140.63	139.00 ~ 142.50
英ポンド	(ドル)		1.2171 ~ 1.2435	1.2399	1.2100 ~ 1.2500
(1英ポンド=)	(円)	*	155.95 ~ 161.53	160.67	158.50 ~ 162.50
豪ドル	(ドル)		0.6872 ~ 0.7063	0.6969	0.6850 ~ 0.7150
(1豪ドル=)	(円)	*	88.12 ~ 91.92	90.28	88.50 ~ 91.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 多川 昇吾

(1)今週の予想レンジ: 126.00 ~ 132.00 円

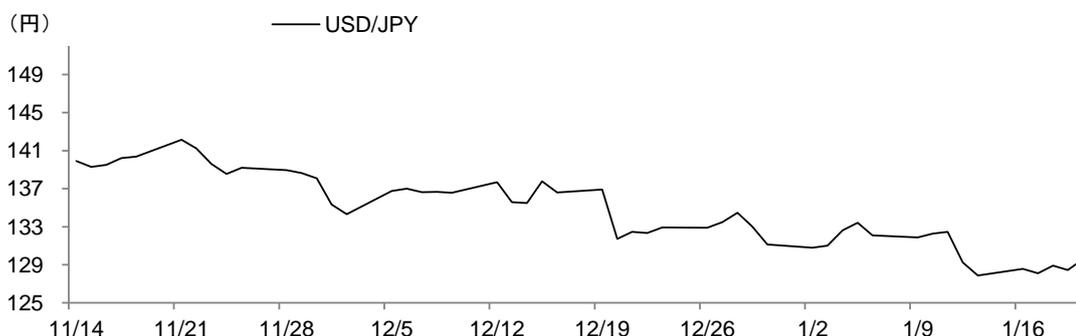
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、日銀会合後に急騰も、その後は上昇幅を縮小した。週初16日、128.03円でオープンしたドル/円は、日銀の政策修正への警戒から円買い相場となり、一時週安値となる127.22円に下落。海外時間は材料難の中、ドル買い相場となり、128円台半ばに上昇した。17日、ドル/円は日銀会合前のポジション調整で円売り相場となり、128円台後半でのレンジ推移。海外時間は、米1月NY連銀製造業景気指数の弱い結果を受け、米金利低下を横目に128円台前半に下落した。18日、ドル/円は日銀がイールドカーブ・コントロール(YCC)の許容変動幅を含め大規模金融緩和政策の現状維持を発表すると、一時週高値となる131.58円に急騰。海外時間は、円の戻り買いや、複数の米経済指標の軟調な結果を受けた米金利低下で128円を割り込んだ。19日、ドル/円は米金利低下を受け127円台後半に下落。海外時間は、複数の米経済指標の堅調な結果を受け、米金利上昇を横目に128円半ばに上昇した。20日、ダボス会議に出席した黒田日銀総裁が大規模緩和を改めて表明したことで円売りが強まり、130.62円までドル/円は上昇するもその後は利益確定のドル売りが先行し、129円台後半まで値を戻し越週した。

今週のドル/円相場は軟調推移を予想。日銀の金融緩和修正への思惑が燦る中、先週のメインテーマは日銀政策決定会合の行く末だったが、結果は現状維持。この結果に期待を裏切られた形でドル買いが加速した。肥大化した緩和修正期待にメスが入ったかと思われたが、ダボス会議で黒田日銀総裁は大規模緩和継続を表明する一方、「もうしばらく待たなければならない」と、緩和修正の未来はそう遠くないとも取れる発言があったことに留意すれば燦り続けた緩和修正への期待を完全に失う理由にはならず、トレンドはやはり円買いか。他方先週発表された米1月NY連銀製造業景気指数の結果が2020年5月以来の低水準となり、米金利の低下を招き、ドル売りが強まる場面があった。今週も、24日(火)米1月製造業/サービス業PMI(速報)、26日(木)米10~12月期GDP(速報)などの発表を控えており、指標結果が不芳な際にはFRBによる利上げペースのさらなる減速の可能性が高まることから、ドル/円には下押し圧力が強まりやすいと予想する。また、チャート上でも明確な下落トレンドが形成される中、2022年5月の126.37円が意識される状況は継続していきだろう。その他今週は、27日(金)に米12月個人消費支出(PCE)デフレーター、米1月ミシガン大学消費者マインド(確報)の発表を控える。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/16~1/20)の値動き: 安値 127.22 円 高値 131.58 円 終値 129.60 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0950 139.00 ~ 142.50 円

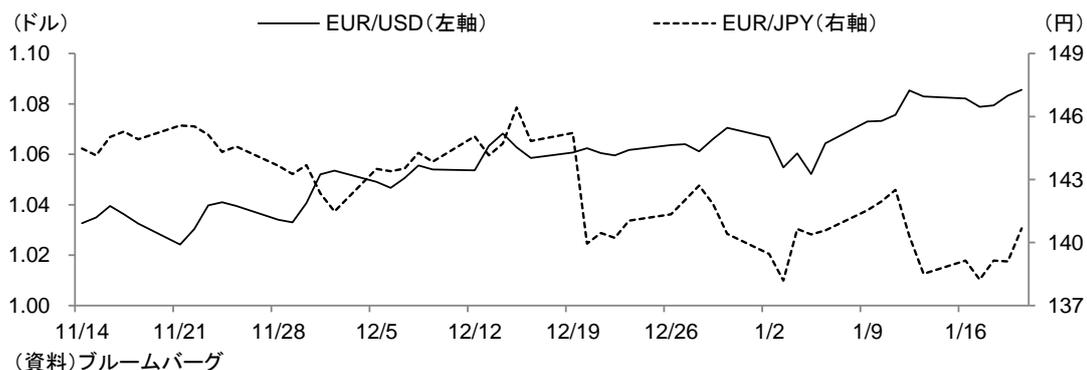
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、主だったイベントがない中、レンジ推移となった。週初16日、1.0822でオープンしたユーロ/ドルは、円買い・ドル売りが波及し1.08台後半に上昇も、独金利低下やドルの戻り買いを受け1.082付近へ往って来い。17日、ユーロ/ドルは軟調な米経済指標を背景に1.08台後半に上昇も、ECBが3月政策理事会における利上げ幅の+25bpへの縮小を検討との観測報道が伝わると独金利急低下を受け1.08を割り込んだ。18日、ドル買い・円売りが波及し一時週安値となる1.0767に下落。ロンドン・NY時間にはドルの戻り売りや米金利低下を受け一時週高値となる1.0887に上昇も、ドルが買い戻され1.08を割り込んだ。19日、ユーロ/ドルは米金利上昇を背景に低下する場面も見られたが、ECB政策理事会議事要旨(12月会合分)におけるタカ派な内容や、複数のECB高官によるタカ派な発言を受け、独金利上昇に呼応する形で1.08台前半に上昇した。20日、ユーロ/ドルは連日のECB高官によるタカ派発言もサポートにじり高となり、1.08台半ばで越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、底堅い動きを予想する。先週は、米1月NY連銀製造業景気指数、米12月小売売上高など米国経済指標は景気後退を意識させる弱い内容が相次ぐ一方、独1月ZEW景気期待指数は、大きく改善しユーロ経済の持ち直しを期待させる内容となった。今週は24日(火)にユーロ圏1月製造業/サービス業PMI(速報)の発表を控える。前回12月については、製造業が47.8と2か月連続での上昇、サービス業が49.8と8か月ぶりの上昇となり、1月分も改善が見込まれる。引き続きユーロ圏の景況感の持ち直しを意識させる強い内容となれば、ユーロのサポートになると想定される。先週、ラガルドECB総裁は改めて足許のインフレ率の高さを指摘し、インフレ抑制に意欲を示すなどECB高官からはタカ派発言が相次ぐ。2月ECB会合前にブラックアウト期間入りする前の高官発言にも注目したい。ECBを前に更にタカ派色を強めるようであれば、ユーロ経済の回復に水を差し、ユーロの上値を抑える可能性には警戒したい。今週は23日(月)にユーロ圏1月消費者信頼感指数(速報)、25日(水)に独1月IFO企業景況感指数が発表予定となっている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/16~1/20)の値動き: (対ドル) 安値 1.0767 高値 1.0887 終値 1.0855
(対円) 安値 137.91 高値 141.68 終値 140.63



3. 英ポンド

欧州資金部 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 1.2100 ~ 1.2500 158.50 ~ 162.50 円

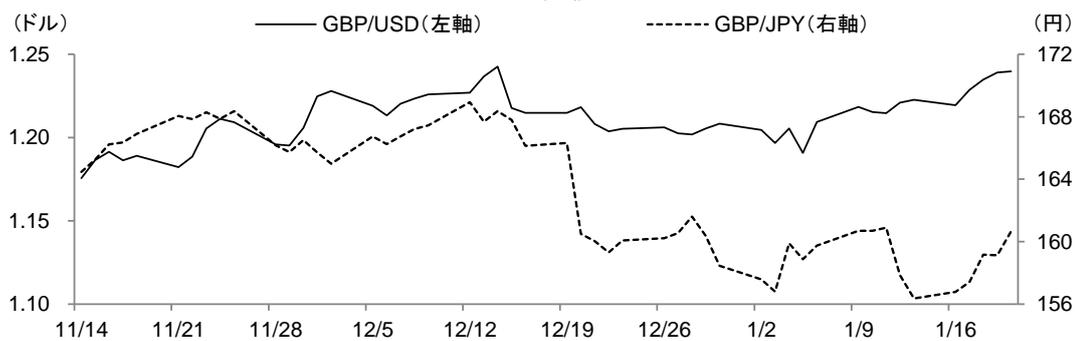
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル対円ともに上昇する展開。週初16日、対ドルで1.22台前半、対円では週安値付近となる156円近辺でオープン。前週から続くドル売り地合いの中で英ポンドは1.22台後半まで上昇するもドル円主導のドル買いに1.21台後半まで反落。対円ではドル円の上昇に連れて156円台後半まで上昇。17日、前日からの上値の重い展開が続く中で英ポンドは週安値となる1.2171まで下落するも、この日発表された英11月雇用統計にて賃金上昇率が市場予想を上回る内容となり1.22台後半まで上昇。対円では157円台後半まで続伸。18日、この日発表された英12月消費者物価指数が市場予想を小幅に上回る内容となったことに加え、日銀金融政策決定会合後にドル/円が断続的に売られ全般的にドル売りが強まる展開に英ポンドは1.23台まで上昇。その後発表された一連の米経済指標が市場予想を下回る内容となるとドル売りが一段と加速し、週高値となる1.2435まで上昇。対円では、市場参加者の政策変更期待を裏切る日銀政策決定により円相場が急落したことで158円近辺から週高値となる161円台前半まで急騰するも、海外時間にかけて158円台前半まで全戻し。19日、材料乏しく1.23台半ばまでの横這い推移となる中、ECB高官のタカ派発言を受けたユーロ高に連れ高となる格好に1.24近辺まで上昇。対円では159円台に上昇。20日、この日発表された英12月小売売上高が市場予想を下回り1.23台前半まで下落するも、FRB高官による次回会合での+25bp利上げを支持する発言などもあり、根強いドル売り地合いが続く中で1.24近辺まで上昇。結局、対ドルではそのまま高値圏で、対円では160円台後半で週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は上値の重い展開を予想。年明けから続く根強いドル売り地合いは、インフレと経済活動の減速を示す弱い経済指標を背景とした利上げ織り込みの剥落がメインドライバーとの理解。2月FOMCの利上げ織り込みは年明けの+35bp程度から先週は+25bp程度まで低下し、前週から更に剥落が進んだ。一方FRB高官からは、2月会合こそ+25bpの利上げを示す発言が見られるも、利上げ局面の長期化と5%超のターミナルレートが明確に示されており、23年中の利下げと4.9%程度のターミナルレートを織り込む市場参加者の期待と乖離している。2月会合の織り込み剥落が進んだ状況下、ドル安が一段と進む展開は考えづらい。先週行われたベイリーBOE総裁による講演では、足許で市場が織り込むターミナルレートが整合的との認識と、インフレ鈍化への楽観的な見通しが示された。足許の英ポンド相場はドル相場主導で底堅い推移となっているものの、英金利は低下基調を辿っておりベイリー総裁に同動きが肯定された状況下、ポンド相場主体での上昇は期待し難い。むしろ、利上げ局面の長期化を示すFRBやECBとのコントラストが意識されやすくなった状況。2月英中銀会合の+50bp利上げへの織り込み余地が残る中、一時的に12月高値を試す展開は予想されるも、ドル安相場の調整を背景とした上値の重い相場展開が基本線。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/16~1/20)の値動き: (対ドル) 安値 1.2171 高値 1.2435 終値 1.2399
(対円) 安値 155.95 高値 161.53 終値 160.67



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6850 ~ 0.7150 88.50 ~ 91.50 円

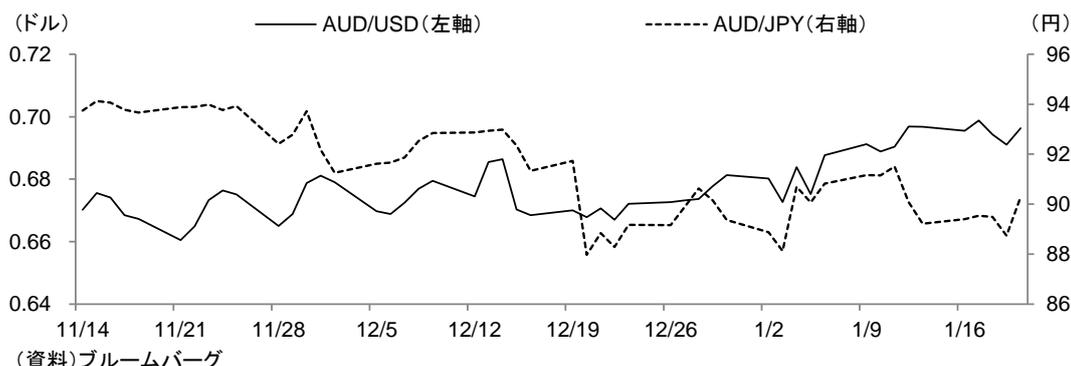
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、上下に値幅は出たものの明確な方向感はず。オープンと同水準で越週する値動きとなった。週初16日は0.6972でオープン。株式市場の堅調推移を背景に0.70台を突破する場面も見られたが、滞空時間は短くほどなくして反落するなど、節目の0.70近辺で上値の重さが意識される値動き。17日は取引材料に乏しい中、0.69台半ばで方向感のない推移に終始。18日は日銀金融政策決定会合で現状の政策維持が発表されると、米ドルを中心に円売りが進み、豪ドル/円も一時2円以上上昇。ただ対米ドルでの豪ドルへの影響は限定的だった。その後米12月小売売上高や米12月生産者物価指数が予想を下回る結果となると米ドル売りが進み、一時週間高値となる0.7063まで上昇。ただ株式市場が下落する動きに、安全通貨需要から一転米ドル買いが強まると、0.69台半ばまで反落した。19日は豪12月雇用統計が予想外に悪化したことを受けて豪ドル売りが優勢。一時週間安値となる0.6872まで下落。その後0.69台前半まで小反発して引けた。20日は明確な取引材料はなかったものの、じりじりと米ドル売りが進み0.69台後半まで上昇。ただそれ以上上昇をする決定打に欠け、0.6969で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い推移となることを予想する。先週19日に発表された豪12月雇用統計の悪化は、金利引き上げによる豪国内の経済への影響が明確に現れたという印象を受ける。24日(火)に豪1月製造業/サービス業PMI(速報値)、25日(水)に豪10~12月期消費者物価指数の発表が予定されているが、良好な結果となっても雇用の悪化を受けた景気後退懸念を打ち消すにはよほどのインパクトが必要だと思われる。むしろ悪化した場合の更なる下押し圧力に警戒したいところだ。また中国が旧正月で大型連休に入ることも影響があるだろう。ゼロコロナ政策撤廃による中国のリオープン期待は、経済的結びつきの強い豪州にはポジティブに働いてきたが、大きなサポートを受けていた豪ドルの下押し材料として作用しそうだ。米ドルはインフレ鈍化やそれに伴う金利引き上げペースの更なる縮小の思惑が依然として強く、米ドル安地合いが続いている。ただ24日(火)に予定されている米1月製造業/サービス業PMI(速報値)など、経済指標の結果次第では値幅が出ることが想定されるが、翌週にFOMCや米1月雇用統計が控えていることもあり、今週に至っては様子見ムードも強く、他通貨に大きな影響を与えるほどの値動きとはならないと考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/16~1/20)の値動き: (対ドル) 安値 0.6872 高値 0.7063 終値 0.6969
(対円) 安値 88.12 高値 91.92 終値 90.28



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。